

生活科における気付きの広がりと深まり

「ありがとう 優しさいっぱいもらったよー赤ちゃんごっこを通してー」

彦坂 登一朗 (愛知教育大学附属岡崎小学校)

中野 真志 (愛知教育大学生活科教育講座)

(2005年10月31日受理)

A Study about the Expanding a Child's "Kiduki" in Life Environment Studies

Touichirou HIKOSAKA (Affiliated Okazaki Primary School of Aichi University of Education)

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

要約 創設以来、初めて改訂された現行の学習指導要領では、生活科において「知的な気付き」が強調されている。生活科の実践が「はいまわる生活科」や「学びのない生活科」に陥る危険性を回避するためには、「知的な気付きを重視する」という観点は重要である。しかし、教師たちから「知的な気付きとは、どのような気付きであるのか」「子どもの気付きはすべて認めることが大切なのに、教師が勝手に取捨選択していいのか」「気付きを広げ深めるにはどのように指導し支援していいのかわからない」という声をしばしば聞く。本小論では、「赤ちゃんごっこ」の実践について、子どもたちの「気付き」に焦点を合わせながら分析し考察した上で、「気付きを広げ深める教師の指導や支援の在り方」について論じる。

Keywords: 生活科, 気付き, 広がり, 深まり

I はじめに

生活科は、周知の通り、平成9年11月の教育課程審議会の中間まとめ及び平成10年7月の教育課程審議会の答申を経て、現行の学習指導要領において創設以来、初めて改訂された。その趣旨は、①「児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視すること」、②「直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にす指導が行われるようにすること」、③「各学校において、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や、重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにすること」である。

ここで「知的な気付きを大切にす指導」が強調された背景には、上述の教育課程審議会の中間まとめで、生活科の現状と課題について「単に活動するだけにとどまっていて、自分と身近な社会や自然、人にかかわる知的な気付きを深めることが十分でない状況も見られる」と指摘されたことがある。

生活科の実践が「はいまわる生活科」や「学びのない生活科」に陥る危険性を回避するためには、「知的な気付きを重視する」という観点は重要である。しかし、教師たちから「知的な気付きとは、どのような気付きであるのか」「子どもの気付きはすべて認めることが大切なのに、教師が勝手に取捨選択していいのか」「気付きを広げ深めるにはどのように指導し支援して

いいのかわからない」という声をしばしば聞く。

本小論では、「赤ちゃんごっこ」の実践について、子どもたちの「気付き」に焦点を合わせながら分析し考察した上で、「気付きを広げ深める教師の指導や支援の在り方」について論じる。

II 実践事例の分析と考察

1 単元 ※1年生児童対象

「ありがとう 優しさいっぱいもらったよー赤ちゃんごっこを通してー」

2 目標

赤ちゃんごっこをするなかで、自分の成長を感じたり、自分を温かく見守ってくれた家族の良さを感じたりする子どもにしたい。

3 指導計画 (23時間完了)

- | | |
|---------------------------|-----|
| • 小さい頃のことについて調べ、発表する | 6時間 |
| • 赤ちゃんベッドに出会わせる | 2時間 |
| • 話し合い「赤ちゃんごっこを見て」 | 1時間 |
| • 赤ちゃんごっこ | 4時間 |
| • 話し合い「赤ちゃんごっこをできて」 | 1時間 |
| • 赤ちゃんのお世話についての聞き取り ※各家庭で | |
| • 赤ちゃんごっこ | 4時間 |
| • 話し合い「赤ちゃんごっこをおわって」 | 1時間 |
| • 家族に手紙を書いたりプレゼント作る | 4時間 |

4 授業の実際

(1) 赤ちゃんにもどりたい…

11月1日, 台風のため1学期から延期となっていた幼保小懇談会において, 幼稚園, 保育園の先生と久しぶりに再会し, 喜ぶ子どもたち。そんな子どもの思いをとらえ, 保護者の協力を得て, 幼稚園・保育園のころの写真とエピソードを用意し, 子どもたちにクイズ形式で紹介した。小さい頃の写真や, 思いもかけないエピソードに, どの子も大喜びであった。そして, そこでの気付きや思いの出し合いのなかで, ある子のつぶやきが印象に残った。

明子	27	わたしは小さい頃のことを少ししかおぼえていないんだけど, お母さんが言ってたから, そのことを知っているんだけど, わたしのお母さんがお宮参りの時に赤ちゃんが着るドレスを, 作ってくれてうれしかった。そんで, この前のお宮参りの時には, わたしの弟が, そのドレスを着ました。
祐理	28	わたしは安城市民会館で年少の時に, 緊張して泣いたことはおぼえてなかったから, 安城市民会館でやったことを, もうちょっと, もうそれは年少のことだったから, 何もおぼえてないから, それをもうちょっと知りたい。
C n	29	ああ, また小さい頃に戻りたいなあ。
C n	30	<u>ほんとだよねえ。赤ちゃんに戻りたい。</u>
C n	31	いや, 戻りたくない。
C n	32	戻りたい。
C n	33	だって, あの子さあ, わがままでさあ…
C n	34	小さい頃に戻って, アリノくんと一緒に赤ちゃんしたい。 (11月11日 授業記録「小さい頃の自分を知って」)

明子27, 祐理28と, 小さい頃の自分を知った思いについての話が続いた後, C n29から34までつぶやきが続いている。なかでもC n30の「ほんとだよねえ。赤ちゃんに戻りたい」というつぶやき声が不思議と心に残った。このつぶやきを発したのは徹夫である。徹夫には正男という1歳になる弟がいる。まだ幼いため, お母さんの手は正男にかかりがちで, 徹夫からはなれがちな。そのことで, 徹夫は少し寂しい思いをしていると, 母親から聞いたことがある。そんな徹夫のことを知っているだけに, このつぶやきが印象深かったのかもしれない。いずれにしても, しみじみともらしたこのつぶやきが彼の本音であることは間違いない。小学校1年生から, 朝早くから家を出て, バスに乗り, 遠くの学校まで自分の力でやってくる附属小の子どもたち。一般校であったら, 6年生の子につれられ

て, 学校に来る学年である。まだまだ甘えたい盛りの子どもたちにとっては大変なことであろう。恵子という子は, 1学期, 「今日は何時間で終わる?」と, 毎日のように尋ねてきた。後で母親に聞いたことだが, あれは, お家に帰りたくて仕方がなかった気持ちの表れであったらしい。きっと, 恵子も徹夫と同じ気持ちであったろう。他にも大なり小なり似たような思いをもった子はたくさんいるだろう。そう考えると, この「赤ちゃんに戻りたい」は子どもたちの素朴な思いなのだろう。どこかで, この思いをかなえてあげられれば。そんな漠然とした願いをもった。

この話し合いによって, 子どもの「もっと, 自分の小さい頃の話を知りたい」という思いを感じたので, 家庭での聞き取りを子どもたちに勧めた。

(2) えーっ!今でもだっこしてもらってるの?

子どもたちの生い立ち調べが進んだ後, 再び話し合いをもった。そのなかで, 「今でもだっこされてるよ」と言う慎吾の発言に対し, 「えーっ!」という声は何人もの口から発せられた。授業中, この「えーっ!」がずっと気になり, ついに残り10分ほどで, 「この『えーっ!』なんだけど, これはどういう意味で言ったのかなあ?やってもらいたくないという気持ちからかな。それとも, 自分もやってもらいたいという気持ちからかな。ちょっと, このことについて考えてみて。」と子どもたちに問いかけた。

すると, 朱美は「はずかしいからやってもらいたくない」と答えた。一方, 明子は「自分は今もやってもらっており, だっこをされると小さい頃にもどりたい」と答えている。常にお姉さんのように振る舞う朱美と, 自分の思いを素直に表現する明子。二人のこの子らしさがよく表れた発言であった。その後, 「自分は今でもだっこしてもらいたいのか」というテーマで学習記録を書かせ, 授業を終えた。

私は今でもだっこをされていてうれしいです。それで, 毎朝, 毎ばんしてもらっています。

(11月25日 朱美の学習記録)

わたしは, 小さいころに, ねつが, でたとき, ベビーカーにのって, ねつびたシートをはって, パジャマをきて, コンビニへ行って, おかしなどかってもらったことがあります。わたしがだっこしてもらうきもち, うれしいです。小さいころの思い出を思い出します。

(11月25日 明子の学習記録)

わたしは, いまもときどきしてもらいます。おとうとともうとがおふろにはいつているとき, わたしだけおふろにはいらなくてママにだっこしてもらいます。おんぶはぜんぜんしません。パパにはだっこでとばしてくれました。

(11月25日 恵子の学習記録)

前時では、「はずかしいからだっこをしてほしくない」と言っていた朱美であったが、この記録には「だっこをされてうれしい」と素直に自分の思いを書いている。朱美の内面にどのような変化があったのだろうか。明子は、「小さい頃の思い出を思い出します」と、やはり素直に自分の思いを書いた。また、恵子の「わたしだけ」からは、大好きなお母さんを自分だけのものにできた喜びが感じられる。その一方で、勇治、美樹、奈美などは「だっこしてほしくない」と考えていた。そんな両者の思いをかかわらせる場を設定した。かかわり合いの授業では、勇治や徹夫の「してほしくない」という意見もあったが、今でもだっこをしてもらっていてうれしいと話すが多かった。

赤ちゃんにもどりたい。徹夫のつぶやきからとらえた子どもの願いを、子どもの生活経験をもとにふくらませていけないか。そんな漠然とした思いから、だっこに焦点をあててかかわり合いの授業を行った。11月26日の「今でもだっこをしてもらいたいか」という授業である。この焦点化によって、最初「だっこをしてほしくない」と言っていた朱美であったが、「だっこをされてうれしい」とみんなの前で話せるようになっていった。このことをとらえて、朱美が変容したとは言わない。「赤ちゃんの頃、お母さんの髪の毛を握っていないと眠らなかった（母親談）」という朱美である。彼女には、もともとそういう子どもらしい感情があったのであろうが、「〇〇すべき」という義務感の強い性格からか、それを素直に出せなかっただけであろう。それが、他者とのかかわりのなかで、その感情が出しやすくなったといったところであろうか。いずれにしても、子どもたちの内面に「赤ちゃんのようにかわいがられたい」という思いが高まってきたと判断し、教材と出会わせることにした。

(3) 赤ちゃんになってみたい



12月1日、教室に赤ちゃん用のベッドと布団セットを持ち込んだ。「これは何でしょう」と問うと、すぐに「赤ちゃんのベッドだよ」「お昼寝用の布団だよ」

「私の幼稚園ではお昼寝はなかったよ」などという答えが返ってきた。その中に「寝てみたいな」というつぶやきが聞こえてきたのをきっかけとして、ベッドと布団、さらには乳瓶と粉ミルクも用意して、赤ちゃんごっこをすることにした。赤ちゃんになったのは、静香と恵子。ミルクを作るのが明子。ミルクをあげるのが慎吾という役で行った。子どもたちは、身を乗り出すようにして、赤ちゃんごっこの様子を見つめていた。

私は赤ちゃんごっこでお母さんになりました。慎吾君がお父さん、赤ちゃんは恵子ちゃんでした。私がミルクを作り慎吾君がミルクを飲ませました。恵子ちゃんは「おいしい」と言っていたので、私も赤ちゃんの役になってみたいです。とても楽しかったです。

(12月1日 明子の学習記録)

ちょっとはずかしかったけど大丈夫です。ミルクはちょっとおいしかったけど最後になると、気持ち悪くなってしまいました。ベッドで寝たときはとても気持ちよくなりました。うれしくてもう出たくなかったです。

(12月1日 恵子の学習記録)

1こめは、お母さん役はとってもたいへんだと思いました。2こめは、お父さん役のこなんくんは、ミルクをのんだことがないと言っていました。だから、いいいけけんをしたと思います。しょうらい、自分の子どもにミルクをあげるのに役立ちます。恵子ちゃんはやっているときに、ちょっといやそうなかおをしていました。

(12月1日 美樹の学習記録)

恵子の「うれしくてもう出たくなかった」からは、赤ちゃん役にひたりきり、安心する気持ちがうかがえる。また、明子の「私も赤ちゃんの役に」からは、そんな恵子の思いに共感し、自分も赤ちゃん役をやりたいという願いが感じられる。そんな二人とは対照的なのが美樹である。「いいいけけんをしたと思います」からは、傍観者的な美樹の見方がうかがえる。だっこについて「今はだっこされたくない」と考えた美樹。甘える姿を見せることに抵抗を感じているのであろうか。そんな美樹だからこそ、「ちょっといやそうなかお」と恵子のそういう表情を見逃さなかったのかもしれない。

(4) わたしはお母さんになりたいな

教材との出会いによって、子どもたちの思いは「赤ちゃんごっこ」に向かい始めた。そこで、そんな子どもたちの思いをさらに高めるために、話し合いの場をもった。

T	1	今から、赤ちゃんごっこをして、あるいは、赤ちゃんごっこを見て思ったことについて話し合います。
---	---	--

奈美	2	私は赤ちゃんごっこをしているときに、赤ちゃんをしたくて手を挙げたのに、先生があててくれなくて、 <u>悲しかったです</u> 。
C n	3	あーっ！
C n	4	先生のせいだ。
徹夫	5	ほくもはお父さん役をしたい。
C n	6	えーっ、徹夫くん（ベッドに）乗ったら、一撃でボコン。
C n	7	違うよ。徹夫くん、お父さん役をしたいって言ったんだよ。
T	8	そうだよ。徹夫くんはお父さん役をやりたいと言ったんだよ。
有紀	9	私は何でもいいけど、先生がミルクを飲みたい人って言って、男の子だったらお父さんになったんだと思うけど、私が思ったのは、二人女の子だったらどうなったのかなあと思った。
C n	10	ああ、お姉ちゃんになるといいよ。
有紀	11	それで、お姉さんとお母さんでやるとしたら、どっちがなりたかったと言ったら、 <u>わたしはお母さんになりたかった</u> 。
明子	12	私は赤ちゃんごっこで、お母さん役をやったけど、 <u>今度は赤ちゃんになってみたい</u> と思いました。
祐理	13	恵子ちゃんは赤ちゃんになってどう思ったのかなと思って、あと、わたしも、お姉ちゃんは、わたしが赤ちゃんの時に、ミルクを3回くらい飲んだことがあるんだけど、赤ちゃんのジュースもいっぱい飲んだことがあって、ジュースはお姉ちゃん自体がまずいって言ってたのが、テレビで見たから、それは飲みたくないけど、 <u>ミルクはテレビで見てないから、飲んでみたい</u> 。
勇治	14	恵子ちゃんがミルクを飲んでいるときに、おいしいのかなと思いました。
早紀	15	赤ちゃんごっこを見てて、自分が小さい頃、どう過ごしてきたかとか、生活してきたかとか、 <u>すごくわかってうれしかった</u> 。 (12月2日 授業記録「赤ちゃんごっこを見て」)

赤ちゃんごっこを見ていて、自分が赤ちゃん役をしたくて仕方がなかった奈美。そんな奈美の思いをとらえて、奈美を第1発言者とした。奈美2の「悲しい」からは、彼女の切実な思いが伝わってくる。有紀11の「わたしはお母さん」、明子12の「今度は赤ちゃん」からは、次の活動について明確な見通しをもちながら、「赤ちゃんごっこをしたい」と意欲を高めている二人の気持ちがうかがえる。また、祐理13の「ミルクは…飲んでみたい」からも、生い立ち調べのことを思い出しながら、ミルクへの興味を高めていることがわかる。早紀15の「すごくわかってうれしかった」であるが、

彼女は、恵子の赤ちゃん役に自分の小さい頃を重ね合わせ、小さい頃の心地よさを思い出しているのであろうか。いずれにしても、赤ちゃんごっこへの子どもたちの強い期待を感じた。

その後、「恵子ちゃんの気持ちが知りたい」という発言が多かったため、恵子への質問コーナーを設けた。次々と、立って質問する子どもたち。子どもたちの思いが十分に高まったと判断し、次のように子どもたちに投げかけた。

T	110	じゃあ、みんな黒板を見てください。恵子ちゃんに話を聞きたい、気持ちを知らりたいという人が、とても多かったように思います。それで、赤ちゃんごっこはやりたい。赤ちゃん役とか、お母さん役とか、お父さん役とか、有紀さんはお姉さんやくもあるねって言ってたよねえ。
C n	111	お兄さん役。
C n	112	おじいちゃん役。
T	113	それで、赤ちゃんごっこをやりたいって言う気持ちは強い？
C n	114	うん、強い。
T	115	それから、恵子ちゃんについて気持ちが知りたいということは、これは自分で赤ちゃんごっこをやってみればわかりそうだね。で、ミルクを飲みたいという人もおったので、赤ちゃんやってみればミルクも飲めるよね。じゃあ、クラスのみんなで、赤ちゃんごっこを役を決めて、やるということでもいい？
C n	116	<u>イエーイ！</u> (12月2日 授業記録「赤ちゃんごっこを見て」)

「イエーイ！」と大喜びする子どもたちの姿から、子どもたちの思いの高まりは十分感じられた。徹夫が発したつぶやき「赤ちゃんにもどりたい」。この願いをかなえてあげたいという思いから生まれた教材が「赤ちゃんごっこ」である。それだからこそ、子どもの心をゆさぶり、ここまで思いを高めることができたのであろう。

5 今日赤ちゃんごっこをやりたいな



12月6日、保護者の協力を得て、布団とは乳瓶を10セット用意し、教室に置いておいた。教室の前のベビーベッドに山積みされた布団を見て、「先生、これ布団でしょ」「今日やるの」「わたし、赤ちゃん役をやりたい」とニコニコしながら、話しかけてくる子どもたち。子どもたちの「赤ちゃんごっこ」への期待をひしひしと感じた。

実際に、活動を始めると、様々な子どもの姿が見られた。それこそ、赤ちゃんになりきって、指をしゃぶりながら、ぼんやり寝ている子。ミルクがおいしいと言って、ゴクゴク飲んでいる子。それとは逆に、「ミ



ルクはまずい」と言って、赤ちゃん役を代わってもらっている子、お兄ちゃん役になったけど、やることがわからず、手持ちぶさたにしている子。お父さん役で赤ちゃんを一生懸命笑わせている子等々。その子らしい活動の様子が見られた。

赤ちゃんごっこは、これまでで4回行ってきた。まだまだ、子どもはあきないようである。この4回の活動のなかで、子どもたちはさまざまな気づきを得てきた。

《明子の気づき》

•お母さん役

•わたしは、赤ちゃんごっこでお母さんやくをしました。ミルクがたいきくんのかおにかかったとき、たいきくんがわらったら、プシャーってかおにかかったんだよ。わたしは大きくなったら赤ちゃんをうんでみたいです。さいしょは、赤ちゃんになってみたら、ミルクがまずかったので、赤ちゃんをたいきくんにかえました。楽しかったです。

(12月6日 学習記録)

•赤ちゃん役

•わたしは、ミルクを2回のみただけど、あとでゲボをはきだしそうでした。なので、2回もミルクをすててしまいました。ミルク、もったいない。ミルクちゃん、ゴメンネ!いつも学校に行くとき、くんべい(明子の弟)がいないとさびしい気持ちになります。とっても楽しかったです。また、したいです。わたしがねてる時、鈴木明菜ちゃんがのぞきこみました。うれしかったです。今日は、鈴木明菜ちゃんが(家に遊びに)くるよていです。たのしみです。

(12月7日 学習記録)

•お母さん役

•わたしは、おかあさんやくをやって、ちさとちゃんがねえちゃん、たいきくんがお父さんで、ゆうたろうくんが赤ちゃんでした。ゆうたろうくんがミルクをちゃんとのんでくれたからうれしかったです。ほんどうの赤ちゃんは、ミルクやおっぱいをのむときに、どんなこと思っているのかなとおもいました。ゆうたろうくんは50しかのまなかったけど、のんでくれてうれしかったです。ミルクはちさとちゃんがつかってくれました。明菜ちゃんは、ほんどうに、ゆびをすっていました。たくみくんは、じぶん一人で本よんでいました。あやなちゃんは、じぶんでミルクをのんで、いろんな赤ちゃんがいました。たのしかったです。

(12月9日 学習記録)

•お母さん役

•わたしの3ばんは、たいき、わたし、ゆうたろう、ちさととのじゅんに赤ちゃん役をしました。
※この日は、時間が足りず、十分に記録が書けなかったようだ。

(12月10日 学習記録)

明子は、赤ちゃんごっこをする前は、赤ちゃん役をやりたいと考えていた。しかし、「ミルクはまずかった」(6日)、「ゲボをはきだしそう」(7日)からは、実際にミルクを飲んで、それがまずいことに気がついたことがわかる。しかし、それでも家で幼い弟の面倒をたまに見ている明子はミルクの大切さを感じているのであろう。「ミルクちゃん、ゴメンネ」(7日)からは、ミルクの大切さを感じながらも、飲めずにしてしまったうしろめたさを感じられる。そのためか、明子はお母さん役ばかりをやっている。お母さん役では、「のんでくれてうれしかった」(9日)と繰り返していることから、赤ちゃんがミルクを全部飲んでくれたうれしさを強くかんじていることがわかる。4回の活動を通して、明子は、「ミルクの味」から、「お母さん役のうれしさ」へと気づきを広げていることがわかる。

《美樹の気づき》

•赤ちゃん役

•赤ちゃんごっこで、みるくをのんだんだけど、このまえ、みんなで、はなしあったとき、「ちのあじ」といった子がいたので、「ちのあじ」がするんだなって、おもったんだけど、のんでみたら、あまくて、くっきーみたいなあじがしたので、とてもびっくりした。赤ちゃんやくはとてもたいへんだなっておもいました。こんど、おかあさんやくになりたいです。みるくをちょっときらいになってしまいました。また、あかちゃんごっこをやりたいです。いいおもいでに、なるとおもいます。また、あの、くまのふとんの中にはりたいです。

(12月6日 学習記録)

•お姉さん役

•いもうと(ママ)は、ただちかくで、赤ちゃんをみまもっているだけだと思っていたんだけど、みまもっているだけでなく、ほんをみせたり、みるくをがんばってあげたりしても、いいなと気づきました。わたしは赤ちゃんにミルクをあげたり、ほんをこえにだしてよんであげました。赤ちゃんやくよりいもうと(ママ)やくのほうすきです。またやりたいです。
(12月7日 学習記録)

•お母さん役

•おかあさんやくをしたんだけど、赤ちゃんに本をよませたりするのに、どの本をよませたらいいかわからなくなってしまっても、どうしたらいいかわかりました。まず本をちょっとよんで、いちばんきょうみのよかった本をよめばいいんだと気づきました。ミルクをつくるのはかんたんだなと思っていたんだけど、ほんとうはたいへんなときもあるんじゃないかな、と思いました。
(12月9日 学習記録)

•赤ちゃん役

•赤ちゃんになってみたら、まえ、赤ちゃんになったとき、ミルクをのんで「おいしくない」と思ったんだけど、今日、のんでみたらおいしかったです。したことは、ベッドにねて、ミルクをのんで、本をよんでもらうだけでした。なんだか、赤ちゃんやくになると、うれしくなるみたいです。
(12月10日 学習記録)

初めてミルクを飲んだ美樹。「あまくて、くっきーみたいなあじ」(6日)とクッキーの味に気づいた美樹だが、それは美樹にとって、あまりおいしいものではなかったようである。「みるくをちょっときらい」(6日)から、そんな美樹の感じ方がうかがえる。だから、おいしくないミルクを飲まなければならないので、「あかちゃんやくはとでもたいへん」(6日)と考えたのであろう。しかし、そんな美樹も、「あの、くまのふとんの中にはいたい」(6日)と書いている。赤ちゃんのこちよさを感じているのであろうか。

次に美樹は、お姉さん役、そして、お母さん役と赤ちゃんのお世話をする役に取り組んでいる。「みまもっているだけでなく、……いいな」(7日)からは、お姉さんの仕事についての美樹の気づきがわかる。そして、「まず本をちょっとよんで、……いいんだ」(8日)からは、立場は違うが、お世話役を続けることにより、お世話の工夫へと、気付きを深めていることがわかる。さらに、「ほんとうはたいへんなときもあるんじゃないかな」(9日)からは、本読みの難しさと工夫への気付きから、ミルク作りについても、その難しさに気付きを広げているように感じる。

そして、美樹は、再び赤ちゃん役になる。「今日、のんでみたらおいしかった」(10日)からは、ミルク

についての感じ方が変容していることがわかる。いろいろな役を経験し、気付きを広げたり、深めたりしていくなかで、このような変容がおきたのであろうか。さらに、「なんだか、赤ちゃんやくになると、うれしくなるみたい」(10日)からは、お世話役を好むかにもえた美樹が、赤ちゃん役にも魅力を感じ始めていることがうかがえる。

《有紀の気付き》

•赤ちゃん役

•わたしは、あかちゃんになって、すごきれいなんです。なぜかという、まえ、なりたいなあとおもってたからです。ミルクはどんなあじなんだろうとおもってたなら、すごくあまくておいしかったです。つぎは、お母さんになりたいです。うれしかったです。
(12月6日 学習記録)

•お母さん役

•わたしは、きのう、赤ちゃんだったから、今日は、お母さんになりました。いちばんやりたかったミルクをつくったりおせわをしたりしました。こんかいの赤ちゃんは、こなんくんが、赤ちゃんでした。それで、こなんくんが、3ぼんもほにゅうびんをつかいました。こんかいの赤ちゃんごっこは、お父さんはいませんでした。きのうは、お母さんが、いなかったけど、今日は、お父さんがいなかったです。だから、きのうと、はんたいでした。またしたいです。
(12月7日 学習記録)

•お母さん役

•わたしは、今日も、お母さんやくをしました。本をよんであげたり、おもちゃであそんであげたりして、なんかはやくお母さんになりたいな、とおもいました。それで、わたしのお母さんのように、しました。ほんとうのお母さんみたいなかんじがしました。あしたは、赤ちゃんです。
(12月9日 学習記録)

•お母さん役

•わたしは、今日も、お母さんになりました。赤ちゃんのやることが、すごくかわいいなど、思いました。ミルクをのませてるとき、ねむったからすごいかわいかったです。わたしも、なりたくなりました。
(12月10日 学習記録)

最初に、やりたがっていた赤ちゃん役に取り組んだ有紀。「すごくあまくておいしかった」(6日)からは、明子や美樹と違い、最初からミルクをおいしく感じている有紀の気付きがわかる。その後、有紀は3回続けて、お母さん役に取り組む。「お父さんはいません」(7日)からは、お父さんが大好きな有紀らしさを感じる。そして、自分のお母さんのように赤ちゃんのお世話を有紀。「ほんとうのお母さんみたいなかんじ」(9日)からは、お母さんの思いに寄り添おうとする有紀の心のうちがうかがえる。有紀のお母さんへのあ

こがれのようなものを感じる。さらに、お母さん役を続けることにより、「赤ちゃんのやることが、すごくかわいい」、「ねむったらすごいかわいい」からは、活動を通して、お母さんの思いの中身について、気付き始めていることがわかる。

これまで、明子、美樹、有紀の気付きについて、考察を加えてきた。このように豊かな気付きが生まれてきたのは、子どもが「赤ちゃんごっこ」という教材に魅力を感じ、主体的、自発的に活動に取り組んだからであろう。また、そうした活動を繰り返すことにより、子どもたちが気付きを広げていくこともわかってきた。なかには、美樹のように、自ら活動に工夫を加え、気付きを深めている例も見られた。しかし、そういった子は少数であり、多くの子どもにとって、気付きは、生まれては消える泡のようなものである。だから、消える前に教師がとらえ、生かすことにより、新たな活動、実りある活動へとつなげていく必要がある。

※本実践で登場する児童名はすべて仮名である。

Ⅲ 気付きの広がりや深まり

『小学校学習指導要領解説 生活編』において、知的な気付きに関して次のように述べられている。「児童における気付きは、対象との情緒的なかかわりを示す傾向が強いと言える。しかし同時に、そこでは知的

な気付きと呼ばれるところのものが育っていることを見落としてはならない。」¹⁾「生活科でいう知的な気付きとは、児童が思いや願いをもって取り組んだ活動や体験を通して、実感を伴って得られた気付きを指すのである。すなわち、児童が次の活動をするのに役立てたり、生かしたりしていけるような質をもった気付きを指していると言えよう。」²⁾「児童が見つけた事物や現象についての直観的な特徴付けやアイデア、比較や関係づけを行って得られた考え方を、自らの論理として、それぞれの児童が進んで言い表わすところのものを、知的な気付きと呼びことができる。」³⁾

平成15年11月に愛知県岡崎市で「第12回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会」が開催された。その大会の研究紀要において、上述の「気付き」の解説をさらに発展させている。そこでは、気付きの広がりを「子どもたちが対象とのかかわりを重ねる中で、自分たちの思いをふくらませ活動を広げたり、他者との情報交換を通したりして、幅広く様々な気付きを得ること」、深まりを「子どもたちが対象と出会った際、直感的に気付いていたものが、さらに深くかかわることにより、実感的な気付きや納得する気付きを得ること」⁴⁾と定義している。

さらに、図1のように「気付きの深まりのレベル」が、子どものかかわり方や表現内容とともに明確に示されている。

表 1

◆気付きが深まる段階

	かかわり方	表現内容	具体例（ウサギの飼育）
直感的な 気付き ↓	対象に心を動かし、諸感覚を働かせて、対象とかがわっている。	見たまま、思ったままを素直に表現している。	<ul style="list-style-type: none"> • ときどきしてるよ。 • かわいいな。ほかほかしてる。 • うさぎさんとたくさん遊びたい。
実感的な 気付き ↓	対象を意識し、 <u>思いを込めて対象とかがわっている</u> 。	対象の様子や対象の反応を、具体的に表現している。	<ul style="list-style-type: none"> • クッキーは、わたしがだくとねちゃうよ。 • トンネルをほるのがすきなんだ。
納得する 気付き	自分から <u>手だてを講じる</u> などして、 <u>思いを込めて</u> 主体的に対象とかがわっている。	対象とのかかわりの <u>手応え</u> を表現したり、 <u>対象の様子や反応を筋道だてて</u> とらえ、表現している。	<ul style="list-style-type: none"> • クッキーはね、こうしてやさしくだくとあばれないよ。 • 大こうぶつのクローバーをあげるね。
自分自身 への気付き	活動に十分浸った後で、対象とのかかわりを振り返っている。	対象とのかかわりの楽しさ、活動への自信、自分自身への成長について表現している。	<ul style="list-style-type: none"> • クッキーのことでわからないことがあったらなんでも聞いてね。 • クッキーのお世話がじょうずになったよ。

※「クッキー」…ウサギの名前

気付きの広がりについては、この定義は支持できる。要するに、子どもが対象と繰り返しかわる中で多種多様な気付きを得ることである。ウサギの飼育の例で言えば、触感で「ほかほか」「どきどき」をとらえていた子どもが、五感を働かせながらウサギと繰り返しかわるなかで、「目が赤いよ」「食べるときガリガリ音がする」などと気付きの視点を増やしていくことと言えるであろう。

気付きの深まりについては、「直感的な気付き」から「実感する気付き」「納得する気付き」と深まっていくと考えられているが、「実感」と「納得」の違いが明確ではないように思われる。例えば、ウサギの飼育の例では、「実感」では「わたしがだとねちゃう」とあり、「納得」では「こうしてやさしくだとあばれないよ」と述べられている。どちらも、自分の行為に対するウサギの反応についての気付きをあらわしているため、同じように捉えることもできる。

しかし、子どものことば、つまり表現内容をよく読むと、その違いが見える。それは、前者の活動が「だきたい」という直感的な思い（「気付き」とは区別する）からの活動であるのに対し、「納得は」「こうしてやさしくだと」ということばからわかるように、ある意図をもった活動である。

例えば、後者の気付きに至るまでの子どもの活動過程を次のように考えてみる。つまり「ウサギと出会って『抱きたい』と思った子どもは抱いてみたが、ウサギがあばれるのでうまく抱けなかった。そこで大人に聞いたり、みんなと話し合ったりして、どんな抱き方が良いのか、試行錯誤しながら思いをかなえる一つの方法を見つけた」のである。

こう考えると、「気付きが深まる段階」の「かかわり方」と「表現内容」で述べられている内容も変化している。「実感」「納得」とともに「思いを込めて」かわる点では同じであるが、違いは、「納得」が「手だてを講じる」点にある。手だてを講じてかわるからこそ、子どもは「手応え」を感じるものであり、また「〇〇したから▲▲になった」という「目的と手段」を意識してとらえることができる、すなわち因果関係を考えたり「筋道立てて」考えたりできるようになったのである。

要するに、「実感する気付き」と「納得する気付き」は、子どもが手だてを講じて対象にかかわるかどうかによって変わってくる。いわば、前者は一方通行的なかわり方による気付きであるのに対し、後者は双方向的なかわり方による気付きであるといってもよい。

最後に、「自分自身への気付き」についてであるが、「納得する気付き」から矢印が伸びていない。おそらく、「直感的な気付き」から「納得する気付き」までの気付きの深まりの過程とは異なるものとしてとらえているのだと思われる。それは、「納得する気付き」

から深化するものでなく、気付きの広がりや深まりによってもたらされるものの見方や考え方の変容の自覚と考えられる。そして、その自覚は、次の活動への意欲となってくる。その意味で、教師は、直感的な気付き、実感的な気付き、納得する気付きという気付きの深まり（気付きのレベル）を考慮しながら、常に子どもが自分自身への気付きを意識できるような環境を構成し、また指導や支援をすることが肝要だと言える。

最後に、低学年の子どもの気付きは、情緒的、無自覚的、断片的という特徴を持っている。従って、そのような気付きを意識的で関連した気付き、科学的な思考や認識、合理的な判断、美的・道徳的な判断につながるような気付きへと高める必要がある。それゆえ、単元や授業の構想、教師の指導や支援において次の点に留意したい。①気付きをとらえるために、学習記録や授業記録、教師メモ等の記録を累積していく、②気付きを広げるために、繰り返し活動する時間と場を保障する、③気付きを深めるために、以下の学習過程を繰り返す〈活動による気付き→話し合いによる気付きの意識化→新たな意識による活動〉。そして何よりも、教師は、確かな子ども理解と教材解釈に基づき、価値ある気付きを見て取って返すこと、多くの子どもにそれを意識させ自覚させることが大切である。

引用文献・参考文献

- 1) 『小学校生活科学学習指導要領解説 生活編』日本文教出版、1999年、62頁（下線は筆者）。
- 2) 同上書、62頁（下線は筆者）。
- 3) 同上書、63頁（下線は筆者）。
- 4) 第12回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会大会 『研究紀要』2003年、18頁（下線は筆者）。